

2019 年度大学奨学生小論文課題図書

課題図書

書籍名	世にも美しい日本語入門
著者	安野光雅、藤原正彦
レベル	ちくまプリマー新書
出版社	筑摩書房
刊行日	2006/01/05
ページ数	144 頁
価格	700 円(税別)



所見

これは大変楽しくおもしろい本です。

しかし、「言葉」という目に見えないものを語るのですから、なかなか手強い本でもあります。

1945年敗戦後、日本に関するものがことごとく、マイナスの評価で論じられるようになりました。日本語もローマ字表記にすべきであると、本気で論じられました。なぜならば、漢字、ひらがな、カタカナ、覚える文字が多すぎて、教育的負担が多いという理由です。

21世紀をおかえるころ、ようやく各国の「文化の多様性」に目が向けられるようになり、「日本の美」も再発見されるようになりました。

この本の特に興味深いところは、それまで日本語の欠点とされていた語彙の多さを「豊かな言語」と評価します。そしてまた小平邦彦(数学のノーベル賞といわれるフィールズ賞受賞)は「日本語はあいまいだから、数学を創るには有利だ」という趣旨の発言をしたそうです。それまで日本語はあいまいであるがゆえに日本人は論理的でなく、ダメなことばかりであるという乱暴きわまりない三段論法がはばをきかせていました。

評価の「基準」が西洋にあったからです。

明治維新のとき西洋諸国の帝国主義に伍するため、近代国家への変容が急がれ、日本は西洋の思想・情報・技術を旺盛に取り込みます。その新しい概念を日本語に翻訳するのに、西 周(にし あまね)の活躍がありました。しかし、その新しい概念に拮抗する考え方がすでにあった。だから、西 周も翻訳が可能だったというような歴史的変遷も興味深く語られています。

そのような日本の言語(思考)の豊かさをかみしめながら、読んでみてください。